

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03384

研究課題名（和文）裏切りの隠蔽と検出における無意識的過程

研究課題名（英文）The unconscious processing of cheater detection and its counter actions.

研究代表者

大久保 街亜 (Okubo, Matia)

専修大学・人間科学部・教授

研究者番号：40433859

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：協調行動は、ヒトの社会に見られる普遍的な特徴である。ただし、裏切りがあると協調関係は成立しない。本研究では、協調行動を成立させる鍵となる裏切りの検出と隠蔽におけるダイナミクスを検討した。それにあたり、「裏切りシグナルの隠蔽やその検出は無意識的な過程か、それとも意識的か？」という疑問を設定した。刻一刻と変化するコミュニケーションにおいて、裏切りのシグナルを隠蔽し、それを掻い潜り検出することは、時間的にも資源的にも負担が掛かる。その負担を考慮すると、これらの処理は無意識的・自動的に行われると考えられる。行動実験、瞳孔径計測の結果から、裏切りのシグナルの隠蔽は無意識的に行われるということを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

協調行動の継続のためには裏切りを防止しなければならない。しかし、事前の防止は難しい。今回の結果でその理由の一端が明らかになった。裏切り者は信頼できるように見えるよう表情やポーズを無意識的にとっていた。果てには、意識的にコントロールできない瞳孔の散大まで行なっていることがわかった。これらが裏切りの検出を困難にしていると考えられる。裏切り意図の隠蔽に、裏切り者の無意識的な行動が寄与しているなら、本人の意図にかかわらずそのような行動をしていることになる。したがって、ルール等による規制では防止が困難である。今回、確認された行動特徴などを利用した裏切り防止のための方策を将来的に検討すべきであろう。

研究成果の概要（英文）：Cooperation is a universal feature of human society. However, mutual benefits from cooperation are at risk if there are cheaters or free riders during the cooperative interactions. The present study investigated the levels of consciousness for the dynamics of cheating in cooperative behavior. We have shown that cheaters in cooperative behavior use a fake smile to disguise their uncooperative attitude, improving facial trustworthiness. In this study, we measured the conscious level of such smiles. We found that cheaters unconsciously chose the most effective way to be perceived as trustworthy, using lateral posing biases and pupil dilations.

研究分野：認知心理学

キーワード：裏切り 意識と無意識 表情 笑顔 信頼感

1. 研究開始当初の背景

協調行動は、ヒトの社会に見られる普遍的な特徴である。ただし、協調行動における裏切り者を排除できなければ、裏切り者が一方的に利益を得て、協調者は不利益を被る。それでは長期における協調行動は成立しない。そこで進化心理学の草分けである Leda Cosmides は「ヒトには協調行動における裏切り者を検出するメカニズムが組み込まれている」という仮説を立てた (Cosmides, 1989)。この仮説は現在も繰り返し引用され、強い影響力がある。

しかし、裏切り者の検出は簡単でない。新聞を賑わす特殊詐欺はその典型例であろう。日常の例だけでなく、実証的なデータも裏切り検出が簡単でないことを示している。最近のメタ分析の結果でも、見た目の信頼感と実際の行動（裏切りをするか否か）には弱いせいの相関しかなかった ($r = .14$, Foo et al., 2021)。申請者は、理論的には説得力がある Cosmides の仮説が単純には支持されないことを説明する「作り笑いによる裏切りシグナル隠蔽説」を立案し (Okubo et al., 2012)、独自の枠組みで研究を進めて来た。Todorov によれば、笑顔は信頼感を高め、協調のシグナルとなる (レビューとして Todorov, 2017)。一方、怒りなどネガティブな表情は相手に不安を与え、非協調すなわち裏切りのシグナルとなる。このような表情と信頼感の関係から、申請者は、裏切り者が作り笑いにより裏切りシグナルを隠蔽し信頼感を高め、裏切りの検出を逃れると考えた。この説明は申請者による研究から支持されてきた。これまでの研究から、全体として裏切り者は、協調者より信頼感が低く見えるものの（裏切りの検出）金銭をやり取りするなど信頼関係が求められるコミュニケーション場面では、笑顔を見せることが示された (Okubo et al., 2012, 2013, 2018)。そして、感情が強く出る顔の左側を相手に見せて笑顔を浮かべることで、見た目の信頼感が高まり、結果として協調者と同じくらい信頼できるように見えることが明らかになった（裏切りシグナルの隠蔽, Okubo et al., 2012, 2017, 2018）。

2. 研究の目的

本研究では、裏切りの隠蔽と検出に関する疑問、すなわち「裏切りシグナルの隠蔽やその検出は無意識的な過程か、それとも意識的なものか？」への回答を目的とする。それにあたり、申請者がこれまで構築してきた裏切り検出の実験パラダイムを発展させ、金銭をやり取りする経済ゲームにおける裏切りの検出と裏切り意図の隠蔽場面を設定し、それぞれの意識レベルを測定する。具体的には、表情の表出を中心にした顔由来の情報に着目し、(1)裏切り意図の隠蔽における意識レベルを測定する手法を開発し、(2)それを使い経済ゲーム中に生ずる裏切り意図の隠蔽における意識レベルを測定した。さらに(3)意図的にはコントロールできない瞳孔反応に着目し、裏切り行為に伴う瞳孔の反応を測定した。また、これらの目的を達成するための準備として、意識レベル測定の基礎研究、顔情報処理の基礎研究を行なった。

3. 研究の方法

意識レベルを測定する手法として、Dienes and Scott (2005) の構造知識帰属法を発展させた。この手法では、デタラメ、直感、親近性（以上、無意識レベル）、経験の想起、規則（以上、意識レベル）という連続的な 5 段階を想定し、帰属する段階を行為者に評定させるという手法を用いる。本研究では、裏切り意図の隠蔽に用いられる左顔ポーズの意識レベルを構造知識帰属法で測定した。第 1 段階でポ

ーズに対する測定ができるよう構造知識帰属法に調整を行った。そして、第2段階で調整済みの手法を用い、経済ゲーム中に生ずる裏切り意図の隠蔽行為の意識レベルを測定した。裏切り意図の隠蔽行為としては、相手に左顔を向けるポーズを対象とした。

瞳孔の測定については、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、元々の計画を変更して実施した。元々の計画では、経済ゲーム遂行中の瞳孔反応を眼球運動追跡装置で測定する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、研究期間のうち2年ほどは対人の実験が非常に困難であった。そのため、この研究計画を実施する上で基礎となった我々の研究、Okubo et al. (2017)で撮影した顔写真を使用した。この顔写真は、経済ゲームで対戦相手に提示するために、できるだけ信頼できる表情とポーズを参加者にとってもらい撮影したものだ。このできるだけ信頼できる表情を浮かべた写真について画像解析を行い、瞳孔サイズを測定した。

4. 研究成果

(1)意識レベルの測定

Okubo and Oyama (2021) ではポーズに対する意識レベルの測定ができるよう Dienes and Scott (2005) 構造知識帰属法を調整した。感情表出を求めたポーズで参加者は左顔ポーズを、感情表出を隠蔽するよう求めた参加者は右顔ポーズをとった。これらのポーズについて、意識レベルを評定してもらった。感情表出を求めたポーズでも、それを隠蔽したポーズでも、参加者は「デタラメ」、「直感」という無意識レベルであると評定することが多かった。意識してポーズをとっている(「経験の想起」、「規則」)を選択した参加者はほとんどいなかった。この結果は、感情表出するポーズも隠蔽するポーズも無意識に参加者はとっていることを示唆している。また、この結果からポーズの左右差についても、Dienes and Scott (2005)の構造知識帰属法を用いて意識レベルを測定することが明らかになった。

さらに、ポーズについて調整を行なった構造知識帰属法を用いて、Okubo et al. (2017)で行なった顔写真を用いた信頼ゲームの実験を追試した。そして、ポーズに対する意識レベルを測定した。実験を実施したところ、裏切り者が左顔ポーズを取りやすいという結果が再現された。さらに、上述の感情表出の実験と同様に、ポーズについての意識レベルは無意識であることが明らかになった。左顔ポーズにより、裏切り者における見た目の信頼感が上昇することを念頭に置くと(Okubo et al., 2017)、この結果は裏切り者が無意識的に裏切り意図の隠蔽を行っていることを示唆する。

加えて、意識レベルを測定する基礎研究として、最も意識的に認知される左右行動である利き手について検討して。そしてその関連で、利き足の尺度を開発し(大久保他, 2022)した。また、利き足、利き手に関する日常行動である歩行時に生ずる接触の左右差についても検討した(Okubo, 2023)。加えて、戦略的ゆえに意識的に選択される格闘技の組み手に関する調査を行い、その結果を国際的な学術誌に掲載された(Okubo, 2022)。

(2)瞳孔反応の測定

Okubo et al. (2023) では、瞳孔反応という意図的にはコントロールできない反応に着目した。瞳孔は感情の覚醒度が上がると散大する。特に喜び、すなわち、笑っているときにそれが顕著である。笑顔は信頼感を上昇させるため(レビューとして、Todorov, 2017)、結果として瞳孔径が散大すると他者から信頼で

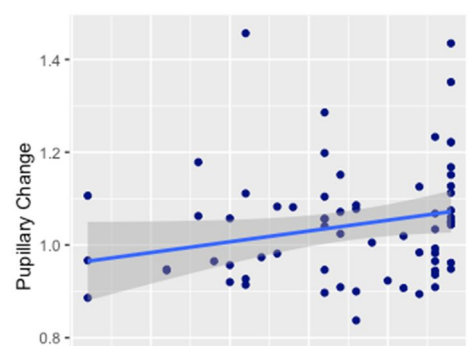


図 1. 経済ゲームにおける裏切り回数と瞳孔散大。裏切り回数が多いほど瞳孔が大きく散大した。

きるように見える (Kret & De Dreu, 2019)。ただし、瞳孔径は意図的に変化させることができない。したがって、瞳孔径の散大は無意図的、無意識的な信頼感上昇のシグナルと考えることができる。我々は、この論文で信頼できるよう表情を作ると瞳孔径が散大することを示した。さらに、図 1 に示したように、この瞳孔径の増大は裏切り者ほど大きくなった。これらの結果は、人々が無意図的・無意識的に瞳孔径を介し信頼シグナルを発することを示している。しかも、裏切り者はそれを協調者と比べて、もっと的確に用いていることがわかった。

瞳孔径を測定するにあたり、眼球の認識に関する基礎的な研究を行った。その過程で視線逆ストロープ効果という現象について、従来の研究とは異なり、視線刺激以外の刺激でも生ずること(Tanaka et al., in press)や顔を上下逆転しても生ずることを示した(Tanaka et al., 2023)。視線逆ストロープ効果は、文字通り、視線だけで生ずると考えられていたため、非常にインパクトのある発見となった。さらに顔の向きなどこれまでの研究では視線と同様の役割を果たすとされてきた刺激で、逆に、逆ストロープではなく、典型的なストロープ効果を観察するなど(Tanaka & Okubo, 2024)、従来の知見を覆す成果を数多くあげることができた。そのほかにも顔の魅力に空間周波数成分が果たす役割を明らかにしたり(Laeng et al., 2020)、それについて文化差があることを示したりすることができた(Saneyoshi et al., 2022)。

(3)まとめ

「裏切りシグナルの隠蔽やその検出は無意識的な過程か、それとも意識的なものか？」という疑問を設定し、行動実験や瞳孔径計測を用いてこの疑問への回答を試みた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大など、ヒトを対象とした対面での実験を柱とした今回の研究計画を実施するにあたり重大な困難があった。それにもかかわらず、制限があるなかなんとか成果を上げることができた。対面での実験をオンラインに切り替えたり、既存の画像素材を用いた検討に切り替えたりするなど、臨機応変な対応が出来たからであろう。困難な状況の中、創意工夫を重ねて行った行動実験および瞳孔径計測の結果から、本研究において裏切りシグナルの隠蔽やその検出がおおよそ無意識的な過程を反映するものであることを明らかにすることができた。

<引用文献>

- Cosmides L. (1989). The logic of social exchange: has natural selection shaped how humans reason? Studies with the Wason selection task. *Cognition*, 31(3), 187–276. [https://doi.org/10.1016/0010-0277\(89\)90023-1](https://doi.org/10.1016/0010-0277(89)90023-1)
- Foo, Y. Z., Sutherland, C. A. M., Burton, N. S., Nakagawa, S., & Rhodes, G. (2021). Accuracy in Facial Trustworthiness Impressions: Kernel of Truth or Modern Physiognomy? A Meta-Analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 01461672211048110. <https://doi.org/10.1177/01461672211048110>
- Kret, M. E., & De Dreu, C. K. (2019). The power of pupil size in establishing trust and reciprocity. *Journal of Experimental Psychology: General*, 148(8), 1299–1311. <https://doi.org/10.1037/xge0000508>
- Øvervoll, M., Schettino, I., Suzuki, H., Okubo, M., & Laeng, B. (2020). Filtered beauty in Oslo and Tokyo: A spatial frequency analysis of facial attractiveness. *Plos one*, 15(1), e0227513. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0227513>
- Okubo, M. (2022). Standing right: Laterality of combat stance in Brazilian jiu-jitsu. *Archives of Budo*, 18, 71-76.
- Okubo, M. (2023). Smartphones and rightward collisions. *Laterality: Asymmetries of Body, Brain and Cognition*,

28(4-6), 357-376. <https://doi.org/10.1080/1357650X.2023.2250075>

- Okubo, M., Ishikawa, K., & Kobayashi, A. (2013). No trust on the left side: Hemifacial asymmetries for trustworthiness and emotional expressions. *Brain and Cognition*, 82, 181–186. <https://doi.org/10.1016/j.bandc.2013.04.004>
- Okubo, M., Ishikawa, K., & Kobayashi, A. (2018). The cheek of a cheater: Effects of posing the left and right hemiface on the perception of trustworthiness. *Laterality: Asymmetries of Body, Brain and Cognition*, 23, 209–227. <https://doi.org/10.1080/1357650X.2017.1351449>
- Okubo, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2017). Can I trust you? Laterality of facial trustworthiness in an economic game. *Journal of Nonverbal Behavior*, 41(1), 21–34. <https://doi.org/10.1007/s10919-016-0242-z>
- Okubo, M., & Oyama, T. (2022). Do you know your best side? Awareness of lateral posing asymmetries. *Laterality: Asymmetries of Body, Brain and Cognition*, 27(1), 6-20. <https://doi.org/10.1080/1357650X.2021.1938105>
- Okubo, M., Ishikawa, K., Oyama, T., & Tanaka, Y. (2023). The look in your eyes: The role of pupil dilation in disguising the perception of trustworthiness. *Journal of Trust Research*, 13(1), 87-97. <https://doi.org/10.1080/21515581.2023.2165090>
- 大久保街亜・田中嘉彦・鳥山理恵・石川健太. (2022). 日本語版ウォータールー利き足質問紙の作成. *心理学研究*, 93(3), 240-248. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.93.21218>
- Saneyoshi, A., Okubo, M., Suzuki, H., Oyama, T., & Laeng, B. (2022). The other-race effect in the uncanny valley. *International Journal of Human-Computer Studies*, 166, 102871. <https://doi.org/10.1016/j.ijhcs.2022.102871>
- Tanaka, Y., Ishikawa, K., Oyama, T., & Okubo, M. (2023). Face inversion does not affect the reversed congruency effect of gaze. *Psychonomic Bulletin & Review*, 30(3), 974-982. <https://doi.org/10.3758/s13423-022-02208-8>
- Tanaka, Y., Ishikawa, K., Oyama, T., & Okubo, M. (2023). Eye gaze is not unique: The reversed congruency effect on gaze and tongue targets. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, <https://doi.org/10.1177/17470218231203187>.
- Tanaka, Y., & Okubo, M. (2024). Reversing the reversed congruency effect: directional salience overrides social significance in a spatial Stroop task. *i-Perception*, 15(2), 20416695241238692.
- Todorov, A. (2017). *Face value: The irresistible influence of first impressions*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 13件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Okubo Matia, Ishikawa Kenta, Oyama Takato, Tanaka Yoshihiko	4. 巻 13
2. 論文標題 The look in your eyes: The role of pupil dilation in disguising the perception of trustworthiness	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Trust Research	6. 最初と最後の頁 87～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/21515581.2023.2165090	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tanaka Yoshihiko, Ishikawa Kenta, Oyama Takato, Okubo Matia	4. 巻 30
2. 論文標題 Face inversion does not affect the reversed congruency effect of gaze	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psychonomic Bulletin & Review	6. 最初と最後の頁 974～982
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3758/s13423-022-02208-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Saneyoshi Ayako, Okubo Matia, Suzuki Hikaru, Oyama Takato, Laeng Bruno	4. 巻 166
2. 論文標題 The other-race effect in the uncanny valley	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Human-Computer Studies	6. 最初と最後の頁 102871～102871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ijhcs.2022.102871	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Okubo Matia	4. 巻 18
2. 論文標題 Standing right: laterality of combat stance in Brazilian jiu-jitsu	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ARCHIVES OF BUDO	6. 最初と最後の頁 17-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Okubo Matia, Oyama Takato	4. 巻 27
2. 論文標題 Do you know your best side? Awareness of lateral posing asymmetries	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Laterality	6. 最初と最後の頁 6~20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1357650x.2021.1938105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保 街亜, 田中 嘉彦, 鳥山 理恵, 石川 健太	4. 巻 93
2. 論文標題 日本語版ウォータールー利き足質問紙の作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 240~248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.93.21218	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishikawa Kenta, Oyama Takato, Okubo Matia	4. 巻 35
2. 論文標題 The malfunction of domain-specific attentional process in social anxiety: attentional process of social and non-social stimuli	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cognition and Emotion	6. 最初と最後の頁 1163~1174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/02699931.2021.1935217	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Overvoll, Morten, Schettino Ilaria, Suzuki Hikaru, Okubo Matia, Laeng Bruno	4. 巻 15
2. 論文標題 Filtered beauty in Oslo and Tokyo: A spatial frequency analysis of facial attractiveness	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0227513
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0227513	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 大久保街亜	4. 巻 47
2. 論文標題 「コンピュータ&エデュケーション」と帰無仮説検定：統計手法の改革は進んでいるか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コンピュータ&エデュケーション	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Yoshihiko, Okubo Matia	4. 巻 15
2. 論文標題 Reversing the reversed congruency effect: directional salience overrides social significance in a spatial Stroop task	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 i-Perception	6. 最初と最後の頁 1~9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/20416695241238692	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ishikawa Kenta, Oyama Takato, Tanaka Yoshihiko, Okubo Matia	4. 巻 -
2. 論文標題 Perceiving social gaze produces the reversed congruency effect	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Quarterly Journal of Experimental Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/17470218241232981	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Yoshihiko, Ishikawa Kenta, Oyama Takato, Okubo Matia	4. 巻 -
2. 論文標題 Eye gaze is not unique: The reversed congruency effect on gaze and tongue targets	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Quarterly Journal of Experimental Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/17470218231203187	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okubo Matia	4. 巻 28
2. 論文標題 Smartphones and rightward collisions	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Laterality	6. 最初と最後の頁 357 ~ 376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1357650x.2023.2250075	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計36件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 16件)

1. 発表者名 Suzuki, A., Ishikawa, K., & Okubo, M.
2. 発表標題 Age-related improvement in face-based trustworthiness judgment: A comparison of younger, middle-aged, and older adults.
3. 学会等名 The 63rd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tanaka, Y., Ishikawa, K., Oyama, T., & Okubo, M.
2. 発表標題 Are eyes special? The reversed spatial Stroop effect on gaze and tongue targets.
3. 学会等名 The 63rd annual meeting of Psychonomic Society, (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Oyama, T., Ishikawa, K., Okubo, M.
2. 発表標題 Gaze cues trigger social facilitation.
3. 学会等名 The 63rd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ishikawa, K., Oyama, T., Tanaka, Y., & Okubo, M.
2. 発表標題 Are you looking at me? Animal gaze produces the reversed spatial Stroop effect in spatial Stroop task.
3. 学会等名 The 63rd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大久保街亜・石川健太・小山貴士・田中嘉彦
2. 発表標題 信頼できる表情における形態的特徴：信頼・裏切り・瞳孔散大
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年5月研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石川健太・小山貴士・田中嘉彦・大久保街亜
2. 発表標題 さまざまな視線に対するヒトの注意特性
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年5月研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山貴士・石川健太・大久保街亜
2. 発表標題 視線手がかり課題における社会的促進.
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年5月研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜
2. 発表標題 視線知覚におけるパーツベースの処理：視線空間ストループ課題による検討
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年5月研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木 敦命・石川 健太・大久保 街亜
2. 発表標題 顔信頼性印象の正確性とメタ正確性の年齢関連差
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山貴士・石川健太・大久保街亜
2. 発表標題 視線手がかりが誘発するパフォーマンス向上.
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜
2. 発表標題 視線のパーツベース処理が逆空間ストループ効果を生じる 倒立顔効果による検討.
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜
2. 発表標題 視線は特別か？視線と舌による逆空間ストロープ効果．
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshihiko Tanaka & Matia Okubo
2. 発表標題 Eye Gaze Versus Head Orientation: The Role of Social Cues as a Target in a Spatial Stroop Task
3. 学会等名 The 62nd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kenta Ishikawa, Takato Oyama, & Matia Okubo
2. 発表標題 The Deficiency of Attentional Processing of Social Stimuli in Social Anxiety
3. 学会等名 The 62nd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takato Oyama & Matia Okubo
2. 発表標題 Gaze cueing and social facilitation
3. 学会等名 The 62nd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Atsunobu Suzuki, Mika Ueno, Kenta Ishikawa, Akihiro Kobayashi, Matia Okubo, & Toshiharu Nakai
2. 発表標題 Bias towards trusting others is associated with insular activity before distrusting them
3. 学会等名 The 62nd annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹内愛彩・大久保街亜・岡村陽子
2. 発表標題 顔と名前の記銘に関する研究
3. 学会等名 第45回日本高次脳機能障害学会学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T.
2. 発表標題 Limited metacognitive awareness to the accuracy of face-based trait inference.
3. 学会等名 The 60th annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Okubo, M
2. 発表標題 Working memory and texting while walking.
3. 学会等名 The 58th Annual Conference of Taiwan Psychological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 実吉 綾子・鈴木 玄・小山 貴士・大久保 街亜・ラエン ブルーノ
2. 発表標題 不気味の谷現象と他人種効果:日本・ノルウェー間比較による検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ahn, M. H., Okubo, M., Kunisato, Y. & Okamura, Y.
2. 発表標題 Cultural differences in child-rearing attitudes and their effects on obsessive-compulsive tendencies: Comparison between Korea and Japan
3. 学会等名 2019 Annual Conference of the Korean Psychological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ishikawa, K., Oyama, T., Tanaka, Y., & Okubo, M.
2. 発表標題 The reversed Stroop effect can be triggered by the human and animal gaze but not the robot gaze
3. 学会等名 The 64th annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tanaka, Y., Ishikawa, K., Oyama, T., & Okubo, M.
2. 発表標題 Eye gaze is not special: The reversed spatial Stroop effect on the tongue and arrow targets.
3. 学会等名 The 64th annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Oyama, T., Ishikawa, K., Okubo, M.
2. 発表標題 Comparison of competing hypotheses of gaze reversed congruency effect.
3. 学会等名 The 64th annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kawasaki, Y., Ikeda, K., Reid, N., Sugimori, E., & Okubo, M.
2. 発表標題 How are critical lures elicited by list items in the DRM Paradigm? Examining the interaction of associative strength and recall order.
3. 学会等名 The 64th annual meeting of Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hong Sheng Lin & Matia Okubo
2. 発表標題 The mood-congruency effect of complex emotions: Investigating the role of patriotism
3. 学会等名 OPAM 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Okubo, M. & Ishikawa, K.
2. 発表標題 Laterality of functional smiles and its relation to facial trustworthiness
3. 学会等名 2023 International Neuropsychological Society Taiwan Meeting
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小山 貴士・田中 嘉彦・石川 健太・大久保 街亜
2. 発表標題 視線逆ストループ効果の促進効果と抑制効果 口頭反応による中立条件の測定
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川健太・小山貴士・田中嘉彦・大久保街亜
2. 発表標題 ヒト，動物，ロボットの視線に対する注意特性：社会的な関係性と逆空間ストループ効果
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中 嘉彦・石川 健太・小山 貴士・大久保 街亜
2. 発表標題 空間ストループ効果と逆空間ストループ効果の時間特性
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋怜奈・大久保街亜・岡村陽子
2. 発表標題 絵文字の使用個数が対人印象に与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木敦命・石川健太・大久保街亜
2. 発表標題 顔に基づく信頼性判断の年齢関連差を媒介する認知的変数
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大久保街亜
2. 発表標題 スマートフォンと接触の左右差
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2023年5月研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川健太・小山貴士・田中嘉彦・大久保街亜
2. 発表標題 ヒトとサカナの目：視線刺激に対する注意特性
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2023年5月研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜
2. 発表標題 視線逆ストループ効果の反応時間分布：2段階仮説による検討
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2023年5月研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小山貴士・田中嘉彦・石川健太・大久保街亜
2. 発表標題 視線逆ストループ効果の生起メカニズム
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2023年5月研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関